

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

**\* 入江情報資料第3弾：東京天文台スケッチ絵葉書**

アーカイブ室新聞 322号に国立天文台 0B の入江氏から種々の資料提供があったという記事を書いた。今回は第3弾として、その中の東京天文台スケッチ絵葉書を紹介したい。これは Sato Akira という人の作品であり、東京天文台職員組合が販売していたものである。

- 1) 東京天文台スケッチ絵葉書 (7枚組、発行年不詳、昭和37年～昭和41年の間)
- 2) 東京天文台スケッチ絵葉書 (7枚組、発行年不詳、昭和41年以降、新たに2枚が加わっている)。

この絵葉書は、スケッチ画を銅版面にしたものと聞いている。まず、1) の6種類である。写真1は絵葉書を入れた袋状のものの表紙である。

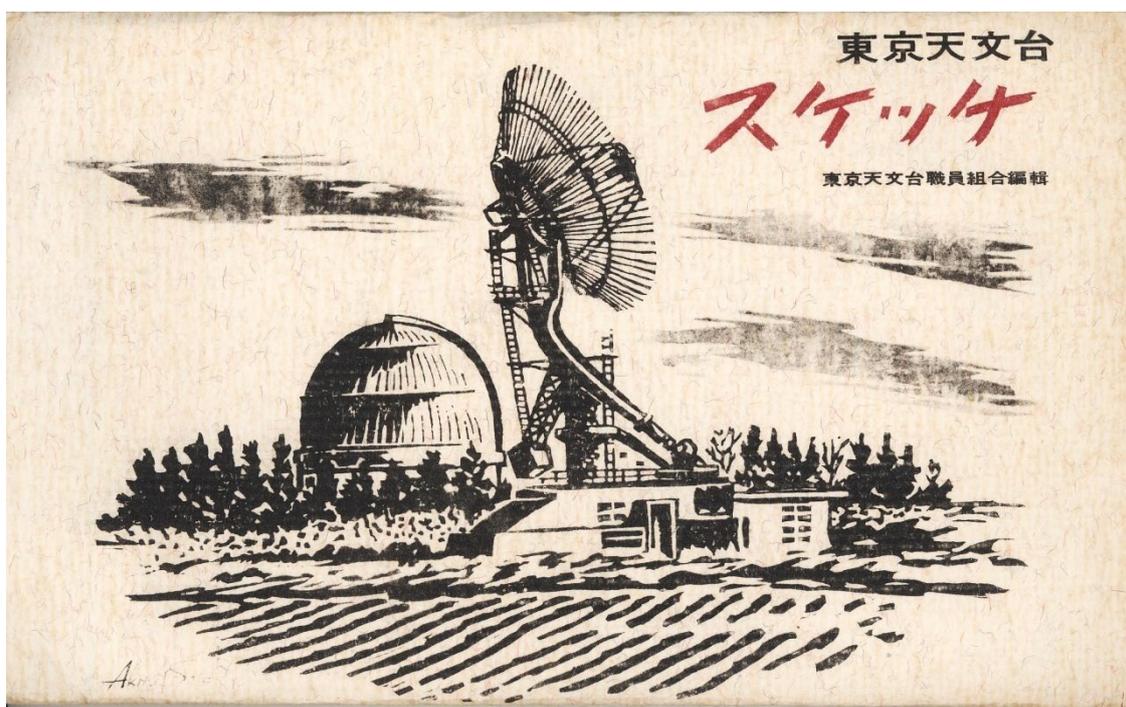


写真1 絵葉書入れの表紙、西から見た10m電波望遠鏡と65cm望遠鏡ドーム

写真2は絵葉書入れの裏表紙であり、東京天文台の説明と構内図、そしてスケッチした方向が入っている。これからこの絵葉書セットは、表紙を入れて7枚組であったことがわかる。

説明文によれば、東京天文台の誕生は、明治11年(1878年)、東京大学理学部に観象台が創設された時に始まる。後に気象台と分離し、天象台となり、明治21年(1888年)港区麻布に移り、東京天文台と呼ばれるようになった。大正10年(1921年)理学部付属から大学付置研究所となり、都市の灯火を避け、武蔵野台地の三鷹に移転を始めた。以後昭和の

初めにかけて 20cm 赤道儀、塔望遠鏡、65cm 赤道儀と、次々に完備し、本格的な天文観測が始められた。第2次世界大戦の間は、多くの混乱があり、特に昭和20年(1945年)には、本館が焼け、貴重な資料や器材の大部分が灰になった。

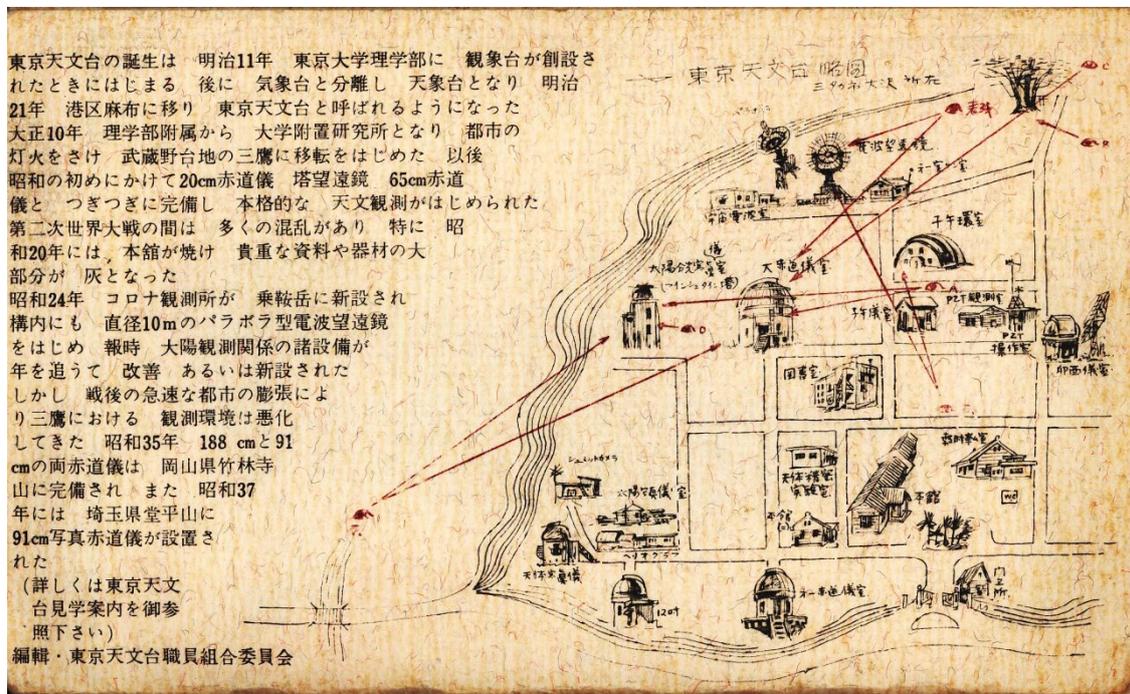


写真2 絵葉書入れ裏表紙 天文台の説明と構内図

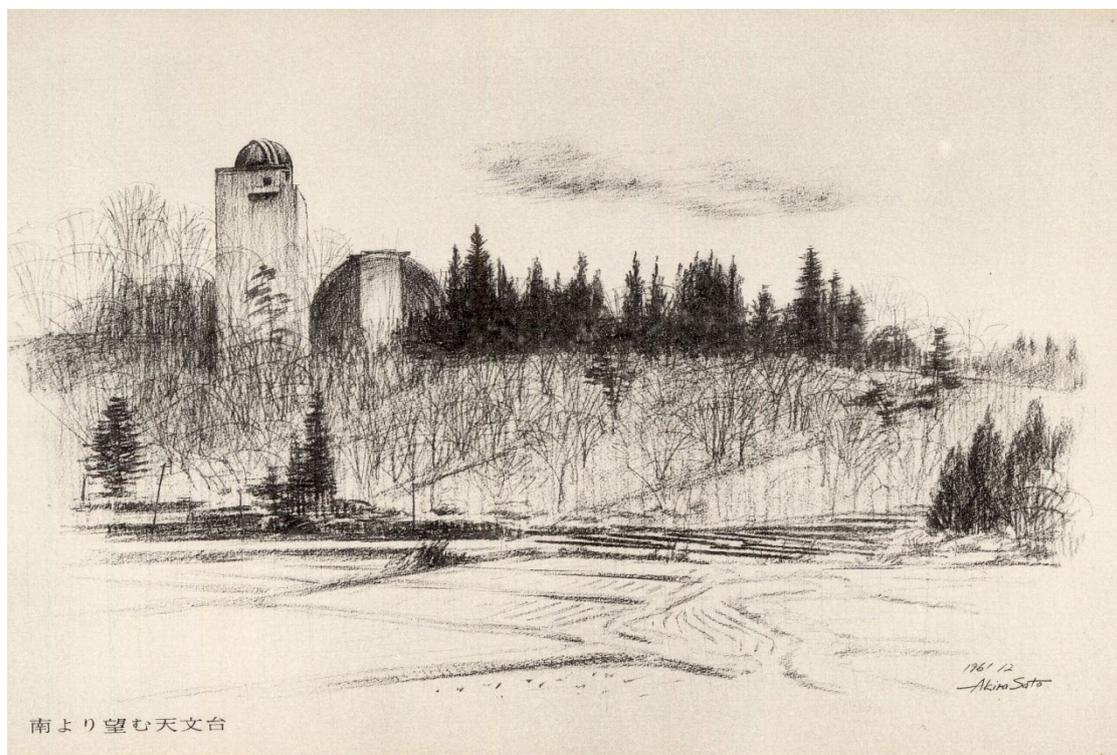


写真3 南より望む天文台 武蔵野台地に立つアインシュタイン塔と 65cm 赤道儀の遠望

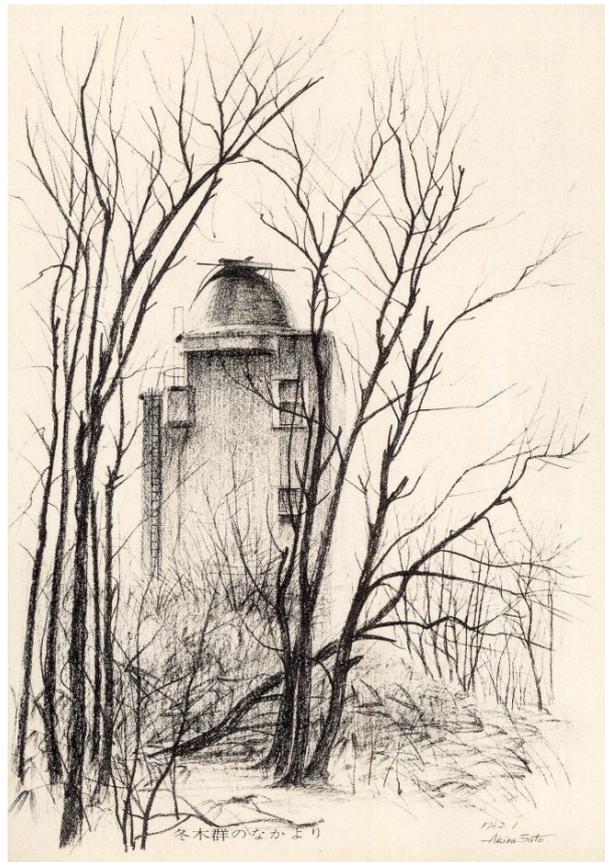


写真4、塔望遠鏡はアインシュタイン塔とも呼ばれ塔全体が望遠鏡になっている。



写真5 直径10mのパラボラ電波望遠鏡と子午環室（口径20cmの子午環がある）

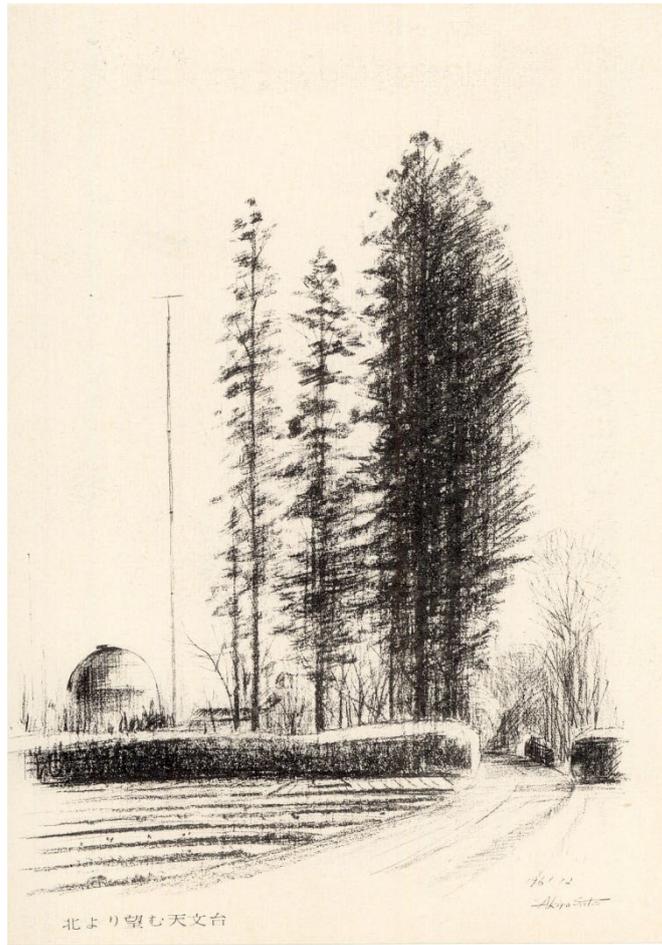


写真6 北より望む天文台、畑の中に立つ国際報時受信用の菱形アンテナと65cm大赤道儀の遠望



写真7 八幡神社跡より望む、1本杉と電波望遠鏡群



写真 8 冬の大赤道儀室、 65cm 赤道儀には写真用の 65cm と実視用の 38cm の望遠鏡が取り付けてある。絵葉書セットは 2 組あり、次のセットの表紙が写真 9 である。

絵葉書セットの裏表紙の説明文の続きを載せる。

昭和 24 年（1949 年）、コロナ観測所が乗鞍岳に新設され、構内にも直径 10m のパラボラ型電波望遠鏡をはじめ、報時、太陽観測関係の諸設備が年を追って改善、あるいは新設された。しかし、戦後の急速な都市の拡張により三鷹における観測環境は悪化してきた。昭和 35 年（1960 年）、188cm と 91cm も両赤道儀は岡山県竹林寺山に完備され、また昭和 37 年（1962 年）には、埼玉県堂平山に 91cm 写真赤道儀が設置された。（詳しくは東京天文台見学案内をご参照下さい）編輯・東京天文台職員組合 とあることから、この絵葉書セットは昭和 37 年（1962 年）以降に発行されたことがわかる。また次の絵葉書セットの構内図には新本館が書かれているから、この絵葉書セットは昭和 41 年（1961 年）以前発行ということがわかる。そして、次の絵葉書セットは昭和 41 年（1961 年）以降の発行ということになる。その頃の東京天文台職員組合は芸術的なセンスを持ち合せていたようである。

次の絵葉書セットの表紙には、Tokyo Astronomical Observatory Collection of Original



に加わった絵葉書は次の2葉である。

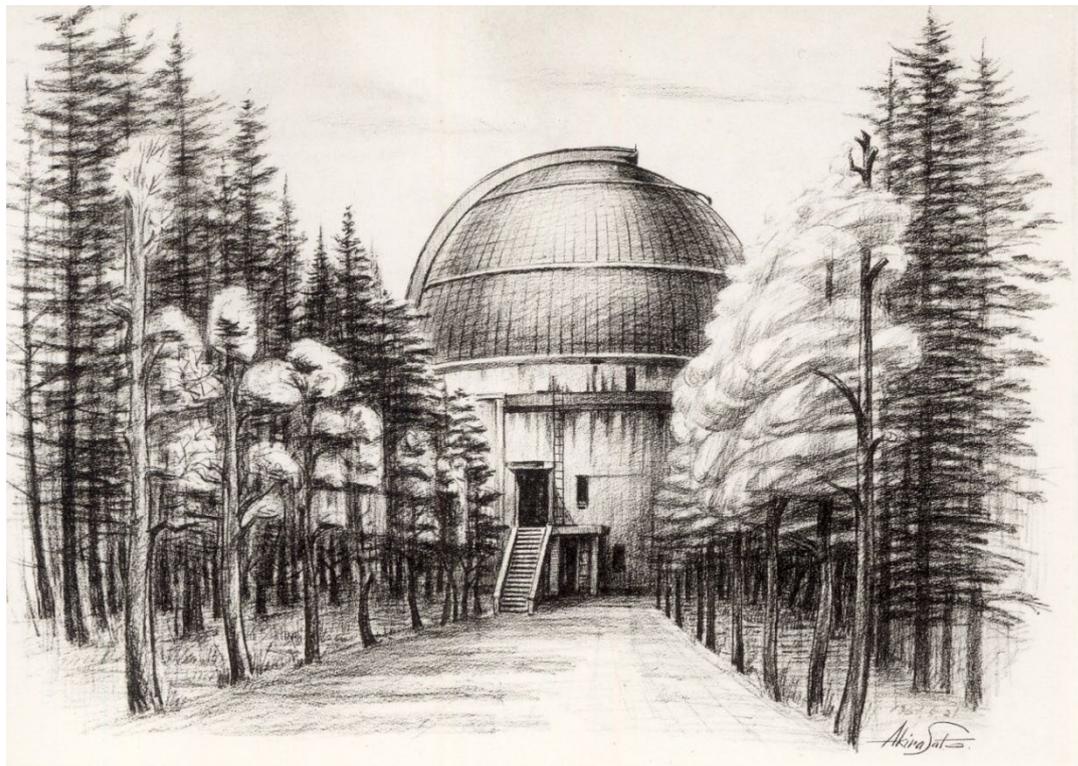


写真 11 65cm 赤道儀室

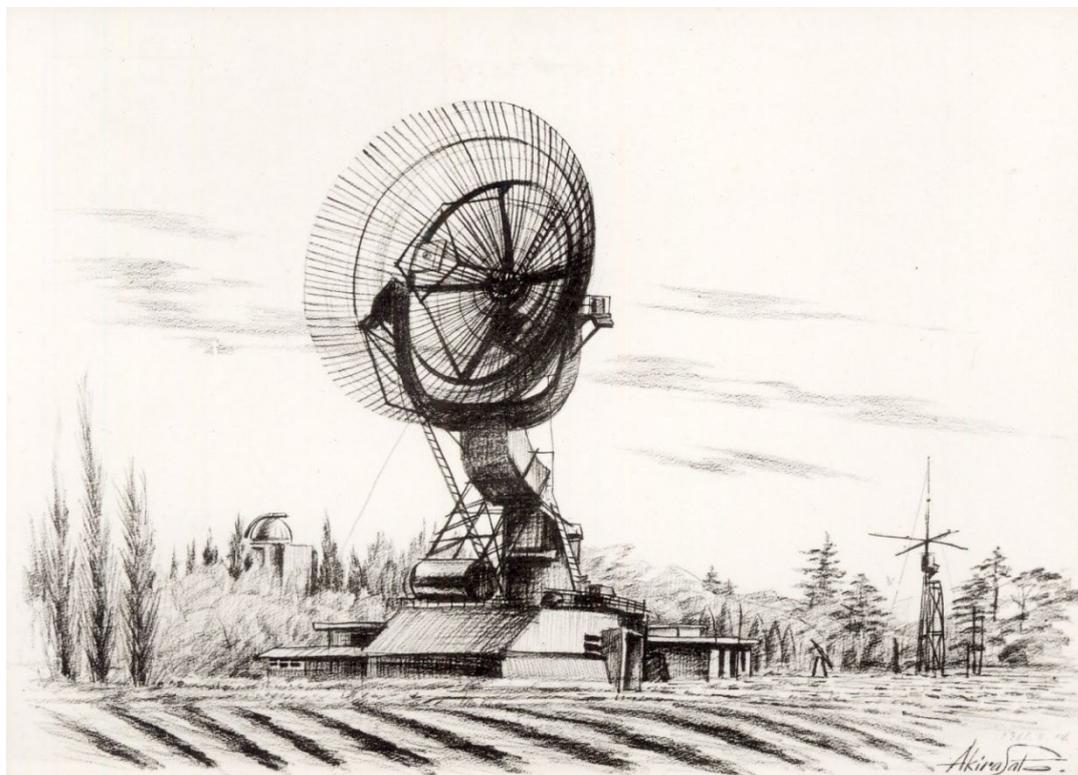


写真 12 10m パラボラ電波望遠鏡の偉容